

課題と展望 【人文学部】

2014（平成26）年度から大幅にカリキュラムを改定し、2017（平成29）年度がその完成年度に当たる。現状ではまだ新旧のカリキュラムが走っているため、旧カリキュラムから新カリキュラムへのスムーズな移行をいかに進めるかが喫緊の問題である。新カリキュラムで新設された人文学演習のあり方についても、その性格付けなどが課題として残っている。また、人文学演習および人文学基礎演習や専門演習は、すべての学部教員が担当することになっているが、一般教育担当教員と専門科目担当教員の区別があるため、担当の仕方にも違いが生じている。また、大学院博士課程開設のために補充された教員の後任人事がないため、その際どのようにしてこれら演習科目を維持するのも考えておかなければならない。場合によっては、入学志願者の減少傾向も勘案して、入学定員の見直しも必要になってくるかもしれない。

また、課外学修課目については、新カリキュラムからレスブリッジ大学・ブロック大学での3週間研修（英米文化特別演習）に加えて、14週間研修（国際文化特別演習）が用意され、研修先の大学で20単位までの修得が可能になった。ただし、現状では、履修の上限が12単位程度にとどまっているため、さらなる工夫が必要である。これらの科目の研修先を、さらにイギリスやアメリカに拡大していけるか否かが大きな課題として依然残っている。なお、日本語教育実習を国内外でおこなう日本語教育特別演習の実習先として、モンゴル文化教育大学も候補のひとつになっているので、その準備も進めなければならない。

入試については、2015（平成27）年度入試から推薦入試〔指定校制〕を導入し、学部理念を理解し、日本文化あるいは英米文化に関心のある向学心に富んだ生徒を受け入れている。また、2018年（平成30）年度入試からは、英語外部試験利用入試〔一般〕を道内の大学に先駆けて導入することになっている。また、同時に2部でも、大学入試センター試験利用入学試験（I期）の導入が予定されている。このように、今後も、少子化の動向を踏まえて、入試制度のあり方（公募制と指定校制の差別化など）を点検することで、優秀な受験生の確保に努めていかねばならない。

大学の出口である就職内定状況については、他学部の学生と比べてもさほど遜色はないが、社会情勢等の変化によって、若干内定率が低くなる場合もある。しかし、従前通り引き続き、4年間の人文学教育を通じて、実学とは一線を画した知識や能力の付加価値をつけて、入学してきた学生たちを社会に送り出す必要がある。

卒業後の進路としては本学に開設されている文学研究科への進学之道も用意されているが、進学希望者は必ずしも多くはない。特に、英米文化専攻への進学希望者をいかに学部教育の中で育成していくかも懸案事項の一つである。